

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名

【 熊本県 】 熊本県立鹿本高等学校

1 実践テーマ	【 III 】
2 実施対象者	生徒 640 名 教職員 24名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 ()</p> <p>② 行事名 (学校行事)</p> <p>③ その他 ()</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目標 (ねらい)	パラリンピアンとの講演を通して、障害者理解を深める。
5 取組内容	<p>パラリンピアンによる講演会</p> <p>平成29年11月21日(火)に本校にて、鈴木徹氏(パラ陸上：シドニー、アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロ大会入賞)を迎え、講演会を行った。</p> <p>(1) 講演</p> <p>『義足を翼にかえて』という題で行われた講演では、鈴木氏が障害を負うまでのスポーツ経験、障害を負った際の事故のこと、事故で入院したときに考えたこと、そしてパラ陸上を始めるに至った経緯やパラリンピックに出場したときに感じたことについてお話いただいた。概要は、以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元々、ハンドボールで国体3位に入るほどの実力があつた鈴木氏は、高校卒業前に自らが起こした事故で右脚を切断することになった。 ・事故後の入院生活では、普通の日常の大切さを感じるとともに、母親のサポートを通して、自分が本当に困っているときに助けてくれる身近な人の大切さを感じることができた。 ・元々、中学校のときに走り高跳びで県大会2位の記録を持っていたことから、右脚の切断後にはパラ陸上の走り高跳びに挑戦することにした。 ・初めて出場したパラリンピックシドニー大会では、スタジアムに観客がほとんどいなかったが、アメリカ人選手に声をかけてもらい、とても刺激を受けた。

	<ul style="list-style-type: none"> ・その後、計 4 回のパラリンピックに出場したが、少しずつ観客の数が増えてきていることを感じる。 ・リオ大会の翌年に出場した世界パラ陸上競技選手権大会で初めて銅メダルを獲得した。メダルの獲得まで9年を要したが、その過程で試行錯誤を繰り返し、様々な経験をした。 ・これからは、もっと障害者を受け入れて積極的に話をして、心のバリアフリーを目指してほしい。 ・小さい時から吃音症というコンプレックスもあったが、スポーツで自信をもつことができた。 ・障害者になったことで、自分は強くなった。逃げずに1歩踏み出し、チャレンジしていくようになった。 ・みんなに伝えたいことは、特別に夢とか目標がなくてもいい。自分がどうなっていきたいか、どうしたいのかが大切だということ。 ・人生には色々と波があるが、波があったほうが楽しいと思うから、チャレンジして良い人生を作っていってほしい。
6 主な成果	<p>講演内容からみた成果</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 自分の弱い部分を認めること、そのことから逃げずに立ち向かうことが大切であることを学んだ。 ② 自分がどうなっていきたいかを大切に、その過程では、試行錯誤を繰り返しチャレンジすることの重要性を学んだ。 ③ 障害者の人と積極的に交流を持って、心のバリアフリーを目指すことの大切さを学んだ。
7実践において工夫した点 (事業の特色)	講演の中で、実際に義足で高跳びをしてもらう場面を設けて、生徒達にパラリンピアンのごさを認識してもらうように努めた。
8主な課題等	体育コースの生徒に特化したような事業も検討していきたい。
9来年度以降の実施予定	来年度も実施したい。